

ありすの杜きのご南麻布 正垣幸一郎

海外研修 週間 報告書

第1週目 合同研修 4/21～27

日付	曜日	AM	PM	備考
4/21	日	移動羽田→CDG(フランス)	CDG (フランス) 一泊	
22	月	CDG (フランス) →KPH (デンマーク)	KPH (コペンハーゲン) →NFHS (ノーフェンスホイスコ ーレ)	
23	火	9:00~12:00 講義「福祉国家を支えるシステ ム・考え方」 講師： Momoyo T.Jorgensen	13:30~保育・幼稚園 視察 Frobjerg-Orte Bornehave リーダー Louise Pihl Andersen 19:00~講義 「世界一幸せな国デンマーク」 講師：千葉忠夫	
24	水	9:00~12:00 認知症住居施設 Gurli-Vibeke 視察 Marte Meo 認定施設 施設長：Anne Mulberg Dahl	青少年教育支援施設 CSV/STU Dockerslundvej 視察 リーダー：Clous Schonberg	
25	木	小学校・0年生クラス Bogense skole 副校長：Catja Kristiansen	母子駆け込みシェルター Krisecenter Fyn センターリーダー Helle Bertram Olsen	
26	金	児童・青少年ソーシャルワーカー (ノーフェン地方自治体)	振り返り	
27	土	ランチ	移動 KPH Airport	

<感想>

この一週間はとても濃い時間となった。

4月23日(火)

合同研修の初日。最初の授業は Momoyo 先生の授業「福祉国家を支えるシステム・考え方」でした。最初にこの授業を受ける必要性が私たちにはあった。これを知っていなければ次からの視察、見学をスムーズに理解することはできなかつただろう。

Momoyo 先生の背景を知ることから始まった。52歳女性。札幌出身の彼女は1990年にデンマークに来た。当時18歳。高校2年生の時に新聞のコラムでこの学校の創始者千葉先生の記事を読み、彼に手紙を書いた。彼の紹介で日本の特養で働いた後、デンマークに来て以来住み続けている。デンマークの特養で働きながら語学学校に行きヘルパー、医療介護士の資格を取った。医療介護士というのは基礎医療ができる介護福祉士のことだ。また実習指導者の資格も彼女は取得している。当時はデンマーク語から日本語に

するのは大変困難でまず、デンマーク語を英語に変換しそこから日本語への変換となったようだ。彼女は結婚してビザを取得できたため永住できている。

彼女の背景に続いて税金の高い国、人間観（ヒューマニズム）、出会い、情報の共有、連携から連帯へ、バックアップの体制、関係性の土台と内容は進んでいった。なぜデンマークはこのような国になったのかの根拠として歴史的な背景があり、国民を国が守る姿勢が出来上がっている。「ゆりかごから墓場まで安心して暮らせる国」を作るために高い税金を国民が払っている。国が保障してくれるという安心がポイントのような気がする。医療、教育、介護の分野を無料で受けることができるのは国民にとって大変重要である。医療について印書に残っているのは風邪をひいただけでは病院は「何もしてくれない」というよりは「何もしない」と言ったほうがよいだろう。ゆっくり寝て水分をしっかり摂りなさいと言われるだけだと言っていた。風邪をひかないように子供の時から免疫を高めるように育てられている。午後に視察に行った保育所では0歳から3歳まではお昼寝をする時間があり、その時間は屋根付きの屋外である意味放置している。そうして免疫力を高めていくみたいだ。それが当たり前のようだ。

医師の考え方も共通しているようだ。医師を管理するのも国の仕事だ。医師を教育するのも国の仕事。患者を管理するのも国の仕事。これらを国が全て管理していくには国民に高い税金を払ってもらわなければならないということだろう。

また子供が病気になった場合、親は最初の1日目は仕事を休むことができる法律もある。子供が病気になったときに必要なのは医師ではなく親であるという考え方だ。夫婦共働きの場合は夫、嫁が交互に第一日目休みを使えば2日間休むことができる。このように働き手のこともしっかりと考えられているところが素晴らしいと感じる。日本では働き手を使い捨てのようにされている感じがある。これには徹底した民主主義を貫くデンマークと経済発展を目指してきた日本の違いがあるように思う。後の千葉先生の授業では「幸せな国を築いていくのに知能指数は関係ない」と言っていた。まさしくその通りだと思う。

私は現場上がりの人間なので、二人の話はとても心に響いた。特に特養の現場を知り、認知症コーディネーターの資格を持つ Momoyo 先生の話はとても共感できた。内容はもちろんのことだが、話す人の情熱が伝わる講義だった。

同日の夜19時からの千葉先生の話も共通している部分がたくさんあった。

講義のタイトルは「世界一幸せな国デンマーク」だ。

83歳の講師が休憩なしで3時間ぶっ続けで行う講義を受けたのは初めてだ。そして対話形式で質問とダジャレだらけの講義で聴講者は刺激的な時間となった。

講義の冒頭は聴講生の自己紹介、講師の千葉先生の自己紹介から始まった。50数年前に地球上に幸せな国はないかと探訪し見つけたのがデンマーク。片道切符で当時26万円をかかった。父の猛反対を受けたが、彼は「ドアは叩けば開かれる、叩かなければ開かれない」という精神でデンマークの門を叩いた。

日本とデンマークの違いという視点から講義は本格的に始まり、政治「女性の首相」、「男女格差の小さい国」、「ゆりかご前から墓場までの社会福祉国家」教育「義務教育」と「教育を受ける義務」の違い、「食料自給率」など真の民主主義とは何か！という問いから深く学んでいくことになった。

真の民主主義を考える上で外せないのが「自由、平等、博愛（+共生、連帯）」である。真の自由とは？平等とは？を対話しながら見つけていく。決して答えを教えない講義。そこから教育制度、就業、税金、福祉についてのお話を聞いた。中でも印象に残った言葉がいくつかある。「幸せの国を作るのに知能指数は関係ない。」「福祉という言葉は死語」

デンマークという国は愛国心が強いと感じた。それは国が国民を守るという強い意志を持っていたから

だと感じる。第2次世界大戦の時ヒトラーに、デンマークの国王は「どうぞ侵略してください」と伝えた。それは国民の命、兵士の命を無駄にしないためだ。自分の国は自分で守る。その意志が代々受け継がれ今なお進化しているのだと思う。福祉の考え方が国のレベルで浸透していると福祉という言葉をあえて使う必要がないかもしれないと感じた。このまま報告書を書けばどんどん増えていきそうなのでこの辺りでやめておくことにする。日本を幸せな国にするために56年もデンマークから発信し続けた一人の高齢者に感謝したいと思う。

朝の9時から始まり22時まで行った合同研修初日。めちゃくちゃ疲れたが、初日から幸せな時間を過ごすことができた。さすが、「世界一幸せな国デンマーク」と感じさせられた。

4月24日(水) 午前

視察先：施設種別：認知症住居施設（認知症グループホーム）

Marte Meo 特別指定施設 Gurli-Vibeke, Hannerupgårdsvej 35, 5230 Odense

対応者：Anne Mulberg Dahl（施設長）

視察させていただいた施設は認知症住居施設で Gurli-Vibeke, という女性の名前を使っている。入居者数は26名。1フロア13人ずつ2フロアに分かれており、施設種別は認知症の方限定のグループホーム。建物は昔の小学校を改築されて建てられ教室として使っていた部屋を居室にしている。建物の構造としては地上3階建て、地下1階となっており1階のテーマは庭、森。2階は海がテーマになっている。3階は職員のスペースになっていた。

環境面ではさまざまな工夫がなされており、真っ白の壁ではなく、色そのフロアの雰囲気を出すようになっている。また、施設の至る所に少人数、もしくは一人で過ごせる空間がある。そこでは絵を描いたり、本を読んだりできるスペースやリラクゼーションできるゆりかごをモチーフにしたリクライニングチェアで音楽が流れるものが設置されており居室でも使用可能だ。母親のお腹にいる感覚を感じることで鎮静する効果がある。また、一人用のソファでビーズのようなものが入った袋で体を包み込むようなソファもあり、抱きしめられ、安全、安心感を得るような効果がある。

床は消音効果があり、尿を拭き取りやすい素材になっている。音を吸収する素材で作られた森の絵が描かれたパーテーションを使い空間を有効活用している。騒音を無くすような工夫がなされている。外につながるドアのガラス面には本棚のシールが貼られており、ドアだと気づかないような作りになっている。

居室の位置付けはアパートメントの一室という考え方で、在宅のお一人の家という定義である。居室には本や家族写真、昔使っていた柱時計やタペストリー、椅子などが持ち込まれている。たとえば本人が本を読むことができない状態になっていたとしても本人にとって意味のある物で囲まれていることが重要だ。また、天井にはリフト用レールが取り付けられている。デンマークでは法律で利用者を持ち上げることが禁止されている。

食堂兼アクティビティールームには天井にプロジェクターが設置されておりテーブルにプロジェクションマッピングが表示され、ゲームを行うことができるようになっている。手に振戦がある男性もそのゲームを楽しんでいた。

ソフト面では Marte Meo（マルテ・メオ）という手法の認定施設として指定されている。この手法の原点は子どもや精神障害者の方と教育者のやりとりをビデオで撮影し、そのビデオを家族やスタッフと一緒にディスカッションし双方の教育課題を自ら解決する力を身につけることを目的としている。この施設は認知症ケアにおいてもマルテ・メオを取り入れ特別指定施設として認定されている。マルテ・メオを入れ

ることではスタッフの退職率が減り、求人も増え、スタッフのモチベーションが上がり、利用者の問題行動も落ち着くようになったようだ。マルテ・メオを中心に家族、スタッフが一体となりケアの方向性を共有できるのは魅力的だと感じた。このように考え方を共有することがデンマークでは当たり前で、それが重要となっている。

4月24日(水) 午後

青少年教育支援施設 CSV/STU Dockerslundsvvej の視察。

成人特別支援教育センターと言われている。

知的や精神的な障害があったりする人が就業するための支援をする施設。また、親元を離れて生活するための支援をする機能もついている。同棲する前のカップルが練習するために使うこともできる。

就業支援は大きく5つに分かれている。1.木工、2.機械工業関係、3.自転車関係、4.美術、家具関係、5.IT関係に分かれている。

この施設は政治家の人の役割として運営を任されている。利用している障がいのある若者は65名程度。先天性、後天性の脳障害を持っている人たちが利用している。最近の傾向としてコロナの後遺症で鬱と診断された人が多いとのこと。職員は25名ほど。利用者は3年間17歳から20歳まで。

ここでは教育、人生における学び、体験系のものを学んでいる。

利用者の多くは複数の病名を持っている。ADD、ADHD、自閉症、発達障害の人たちが利用している。診断名がつかない利用者。コロナによって学校に行けていない(恐怖観念を持っている)人を自治体は調べている。

ここでの授業は昔ながらの伝統的な授業、実践を通して学ぶ体験系のもの、対話がベースになっているもの、媒体がビジュアル系になっているものがある。学び方の手段や方法は各個人に合わせたものにならないというのが教員の課題となっている。彼らは就業するための実践的な実習がメインになってくる。利用者がどのような雇用形態で就業可能なのを見極めていく必要がある。そして、この施設にはこの施設を利用し続けることができるようにするためのコーチが存在する。コーチが付くことによってこの施設を休まなくなった。彼らが休む理由はほんの些細なこと。例えば自転車がパンクしたから、電車が遅れたから、雨が降っているからなどコーチは3日以内にアクションを起こさなければならない。3日続けて休むことがないようにしている。コーチが付くことによって問題が早く解決されるようになった。

4月25日(木) 午前

小学校0年生クラス。Bogense Skole を視察。

デンマークの小学校は0年生から9年生までである。

習熟度に合わせた教育制度になっている。そして、テストがない。小学生になれるレベルか少し時間が必要なのかを教師が判断する。授業の一部を見せてもらった。大きく違うなあと感じたのはデジタル機器の使い方だ。授業ではプロジェクターでホワイトボードに写し、それを子ども達が見る。プロジェクターのほとんどはソニーかエプソン。日本製だった。日本では個人にiPadを配ったりしているが、それよりこの方がよりグループ感が出るように感じた。個人を尊重することも重要だが全体で同じものを見る方が一体感があるように感じた。

子ども達の10時のご飯の様子を見せてもらった。ご飯の前に手を洗う。この学校には上級生もいるので洗面台の高さが明らかに高い。高い洗面台で男の子達は背伸びをして手を洗っていた。そうするとある一人の女の子が椅子を持ってきて手を洗いやすいように設置した。いつもしているのかもしれないが、先生が準備をしたりするのはなく子ども達に考えるようにしているように見えた。日本では先に何かしてあ

げることが良いことのようにになっているが、自分たちで考えるように見守ることが大切に感じた。

4月25日(木)午後 母子駆け込みシェルター

母子駆け込みシェルターを見学させてもらえるような機会は滅多にない。山奥の中にこの施設は存在する。色んな理由でこの施設には親子がやってくる。今回は一人の女性が私たちの質問に対応してくれた。私たちが訪れると2人のソーシャルワーカーが私たちを迎え入れてくれた。円形に座り前面にソーシャルワーカーと利用しているお母さんが座った。この形はバリデーションの授業を受けていた時と同じ形。そして、キューブラーロスが癌患者を教師として教壇に立たせたことを思い出させた。当事者の声を聞くことの重要性を感じた。今回私たちに対応してくれたお母さんはご主人からDVを受けていた。この施設を利用するきっかけは「命の危険を感じたから」とのこと。ストーカー被害にあっていた。周りの人から何度か勧められたが、「夫は立ち直る」と信じていた。とのこと。でもそうはならなかった。自分自身のことがわからなくなってきていた時に声をかけてもらったとのこと。涙ながらに今までの体験を語ってくれた。ことが印象的だった。この母子駆け込みシェルターを見学できたことはとても良かった。当事者の声を聞くことの重要性を感じた。

4月26日(金)午前

講義：児童・青少年ソーシャルワーカー（ノーフェンス地方自治体）

講師：Jan Jørgensen

現場のソーシャルワーカーさんからの実務を通して講義を受けた。デンマークには「健やかな生活を送らなければならない」という法律がある。ソーシャルワーカーは通報があったら24時間以内にアクションを起こさなければならない。病院からの通報もある。ソーシャルワーカーは子供にすぐに会いに行く。その子供の様子をみて緊急性が高いのかそうでないのかを判断する。病院にもコンタクトをとる。なぜ病院に行ったのか？自殺未遂？自傷行為？性的な虐待？などを調べる必要がある。彼の専門は犯罪系を担当することが多い。ケースによっては心理士、ソーシャルワーカー、警察と連携しながら進めていく。対象となる児童には多くの場合安心を得ることができる大人を一人持っている。学校の先生など。ソーシャルワーカーはその安心できる人が誰なのかを聞き出し、その大人を児童のそばに置いて問題を整理していく。ソーシャルワーカーの優先順位は常に子供の安全、安心である。その児童の家の文化や背景を調査しながら勧めていく。調査の手引書に沿って行われる。この手引書は国の社会省と呼ばれるところが作成している。イギリスのメソッドを応用している。どのように子供と接するのかをロールプレイで説明してくれる。ソーシャルワーカーは子供にとって安心できる存在にならなければならない。ケースによっては議員のトップ、裁判官、児童心理士、ソーシャルワーカー、弁護士、お父さん、お母さん、子供を交えた会議を行う場合もある。そのイニシアチブを取るのはソーシャルワーカーの仕事である。デンマークの福祉関係の職員のトップは政治家である。そのためソーシャルワーカーが困った時などには政治家に24時間連絡を取れるシステムがある。緊急一時保護をする申請を政治家にする。子供と親を離れた方が良い場合がある。その場合の費用は全て地方自治体が負担。子供にはコンタクトパーソンと言ってお世話する人が付くことになる。費用はひと月に88万から200万円ほど支給される。

これらの費用を政治家は用意する必要がある。お金がないという理由で実行しない政治家は辞めさせられることになる。

福祉職員は常に国、行政に守られているという部分が日本とは大きく違う。そして各専門職が連携、連帯し責任を持って専門性の高い仕事を提供していくことで福祉の世界が成り立っているように感じた。

この1週間はデンマークの制度や専門性の高さを学んだ。専門性を高めることができるのは国が守ってくれるという安心があるからこそできるのだろう。このようなシステムを国が作っていると福祉という言葉は必要なくなってくるのだと思った。

このような学ぶ機会を与えてくださった中央馬主社会福祉財団をはじめ、きのこグループに大変感謝している。学んだことがこれからの私の実務に活かしていけるようにしたいと思った。





